

ベンジャミン・フランクリンと福沢諭吉 ～笑いを比べてみると～

共通教育科 准教授 林 幸子

ベンジャミン・フランクリン（1706～1790）と福沢諭吉（1835～1901）の二人を並べると、100ドル札と1万円札の肖像画を思い浮かべる方が多いかもしれませんが、今回は二人の著作における共通点として、笑い、ユーモアを取り上げてみます。



フランクリンの名前は、幕末文久年間 1886 年頃に出版された『玉石志林』において日本の文献に初登場し、略歴が紹介されています。特にその自伝 (*Benjamin Franklin's Autobiography*) が注目を浴び、明治期だけでも 10 種類以上の翻訳がなされその人気ぶりがうかがえます。フランクリンの合理的考え方や立身出世志向が、西欧文明を貪欲に吸収しようとしていた明治初期の新種の気運と一致し、広範囲の人々の共感を呼び起こしたようです。

その結果、風を用いた稲妻の放電現象の実験をした科学者として、アメリカ独立宣言の起草者の一人として、又勤勉な政治家として、彼の名は今日の日本でも良く知られています。

ところが、まず初めに彼の名をアメリカ全土に知らしめたのは、処世術を面白おかしく綴った『貧しいリチャード暦』という読み物風の暦でした。18 世紀のアメリカにおいては、暦は民衆にとって聖書に次ぐ大切な読み物で、1732 年から 25 年間発行され続けたこの暦は、毎年 1 万部以上の売り上げを示す人気ぶりだったそうです。内容は、タイトルが示すように妻に頭の上がらぬ貧しい印刷屋リチャードが、彼の周りの面白い出来事や生活に役立つ処世術をユーモラスに語ったもので、風刺に富んだ格言が次から次へと現れます。

（フランクリンの格言というと“Time is money”「時は金なり」が有名ですが、これは『若い商人への助言』という別な著作中に出てきます。）彼のユーモア感覚は後日アメリカ文学史の中で、アメリカン・ユーモアの第一歩を記したと評価されることになります。

しかしながら明治期の日本では、フランクリンの勤勉さが強調されるあまり、底に流れるユーモアについての言及はほとんど見当たりません。さらに彼のユーモアが最も顕著に表れている『貧しいリチャード暦』についての言及や翻訳は皆無に等しいものでした。アメリカにおいては高く評価されていたフランクリンの多様性やユーモアは、当時の日本では十分に理解されていなかったということで、明治時代の日本におけるフランクリン受容の欠陥であったと言えます。

ユーモアの要素が欠落していたとも思えるフランクリン受容史の中で、一人異彩を放っていた人物が福沢諭吉です。福沢はフランクリンより一世紀以上遅い時代の人物で、フランクリンについての情報やその著作に親しめる立場にありました。そのためか、フランクリンに関する言及は福沢の著作の随所に見られ、『西洋事情』（1870）では、フランクリン

の言葉を通して自由、独立という語句の意味を紹介し、続けて独立宣言の全文和訳を載せて



ていますし、『学問のすすめ』(1876)にも、フランクリンの言葉が引用されています。その中で、ユーモアという観点から特筆すべきは、イギリスの *The Moral Class-book* (1861)を翻訳し『童蒙をしへ草』(1873)として発表したことです。『童蒙をしへ草』は青少年向けの一種の道徳教本で、若者に向けて『貧しいリチャード暦』から格言がいくつか引用されています。フランクリンの格言原文、一般的な和訳と福沢の翻訳を比較してみましょう。右側が福沢訳です。

- The sleeping fox catches no poultry. ⇒ 朝寝する狐は鳥にありつかず
(寝ている狐には鶏を捕まえられない)
- There will be sleeping enough in the grave. ⇒ ねぶたくば飽くまでねぶれ棺の中
(墓に入れば好きなだけ眠れるでしょう)
- Early to bed and early to rise, makes a man healthy, wealthy and wise.
(早寝早起きすれば、健康に裕福にそして賢くなれる) ⇒ 早く寝(い)ね早く起れば知恵を増し
身は健(すこ)やかに家は繁昌

福沢の見事なまでの五七調の訳文は、フランクリンがリチャードをして語らせた処世術の内容を的確に表しているばかりか、『貧しいリチャード暦』の持つユーモア溢れる娯楽的雰囲気巧みに伝えている名文です。これはとりもなおさず福沢がフランクリンを表面的に評価してだけでなく、彼の合理的考え方や行動に深く共感し、さらには底に流れるユーモアのセンスを感じ取っていたからに他なりません。

こうした福沢のフランクリン理解の深さは、フランクリンの自伝と福沢の自伝『福翁自伝』(1899)とのあいだに見られる偶然とは言い難い類似性を生み出しています。紙面の関係で今回は具体例を省きますが、自分の失敗をコミカルに笑い飛ばしたり、形式的な宗教活動を風刺したり、軽妙洒脱な語り口を用いたり、両者の自伝に共通のユーモア精神を見出すのは難しくありません。是非原作に触れて両者の笑いを感じていただけたらと思います。福沢の著作には、自伝執筆に際してフランクリンの自伝を参考にしたというような記述はありません。しかし直接的にはないにしろ、福沢はフランクリンの著作に触れることでユーモアの醍醐味を感じ取り、生来のユーモア感覚にプラスして独自の笑いの世界を構築していったのではないのでしょうか。

最後に1つだけ両者の自伝に見られる類似点の例を挙げます。それは共に自国の激動期に、政治家として教育者として文筆家として生きた己の人生を振り返った時の言葉です。フランクリンは、「もしもお前の好きなようにしてよいといわれたならば、私は今までの生涯を初めからそのまま繰り返すことに少しも依存はない。ただし、著述家が初版の間違いを再版で訂正するあの便宜だけは与えてほしいが。」(『フランクリン自伝』p.8)と

ユーモラスに語っています。一世紀遅れて福沢も人生を振り返り、「私は自身の既往を顧みれば遺憾なきのみか愉快なことばかりである。」（『福翁自伝』p.317.）と豪放に語っています。激動の人生に対して二人が同じように放ったおおらかでゆとり溢れる言葉は、多様な顔を持つ二人のユーモアの根幹にあるものを映し出しているようです。物事に対するおおらかで自信に満ちたゆとりを持った二人は、高額紙幣の肖像の堅苦しい表情の裏で、にやりと笑っているに違いありません。

参考文献

- (1) 松本真一、西川正身訳『フランクリン自伝』（岩波書店、2010 改訂版）
- (2) J. A. Leo Lemay & P. M. Zall ed., *Benjamin Franklin's Autobiography* (New York: W. W. Norton & Company, 1986)
- (3) 福沢諭吉『福沢諭吉全集』（岩波書店、1962）
- (4) 福沢諭吉『新訂 福翁自伝』（岩波書店、2008 改訂版）

* 写真は Wikipedia から掲載。